

# 移動表現における様態動詞の分類\*

守田 貴弘

## 1

### 導入

本研究は、移動事象の描写に使われる動詞のうち、移動の様態を表す動詞(様態動詞)の語彙的性質と統語的性質を分析することによって、現代フランス語の書き言葉における様態動詞の分類を提案することを目的とする。本節ではまず、本研究の枠組みを説明し、扱う問題を明らかにする。

#### 1.1 移動表現の類型論

認知言語学では、移動という外界事象が言語で表現されるときに規則性について多くの研究がなされている。Talmy(2000)の類型論では、移動を構成する概念が「移動の事実」(motion)、「経路」(path)、「移動物」(figure)、「基準物」(ground)と、移動に付随するイベント(co-event)に分けられ、これらの概念が形態・統語的に実現されるときに規則性によって類型が提唱されている。

(1) a. The bottle floated into the cave.

b. La botella entró flotando a la cueva. (Talmy 2000 : 227)

(1)の英語とスペイン語であれば、移動物が主語であるthe bottleとla botella、基準物が前置詞の目的語the caveあるいは場所補語a la cuevaによって表され、移動の事実そのものが動詞で現れている点で共通している。だが、移動の経路と、付随イベントの1つである「様態」(manner)の現れ方は異なっている。(1a)の英語では、経路は動詞に付随する副詞的要素(satellite)であるintoによって表され、様態は動詞に包入されているのに対し、(1b)のスペイン語では、経路は動詞に包入されており、移動様態は動詞の従属形flotandoで付随的に表現されるという相違である。

現状では、移動の経路が動詞で表されるのか、それとも動詞以外の付随要素で表されるのかという基準に基づき、2つの言語類型が提案されている。すなわち、英語のように経路を動詞の付随要素で表す付随要素枠付け言語(satellite-framed language、以下S言語)と、スペイン語のように経路を動詞で表す動詞枠付け言語(verb-framed language、以下V言語)である。各類型には以下の言語が含まれると考えられている。

(2) a. S言語:ゲルマン系諸語、スラブ系諸語、フィン・ウゴル系諸語、中国語など。

b. V言語:ロマンス系諸語、セム系諸語、日本語、韓国語など。

#### 1.2 フランス語の類型論的地位

この類型論にしたがった場合、フランス語はスペイン語と同様にロマンス語系であり、V言語に分類されることになる。確かに、(1)に対応する状況はフランス語では(3a)のように表現されるだろう。

(3) a. La bouteille est entrée dans la grotte en flottant.

b. #La bouteille a flotté dans la grotte<sup>1</sup>.

(3a)では、経路は主動詞で表され、様態は動詞の従属形であるジェロンディフで表されている。(3b)のように様態動詞を主動詞として使った場合には、瓶が洞窟の外から中へと移動したという解釈ではなく、洞窟内に漂っているという解釈になるため、意味が異なる。

その他の例を観察した場合にも、この情報の分布は守られる。

(4) a. Elle (=pluie) était tombée du ciel cette nuit, et voilà qu'elle remontait. (Rivière : 35)<sup>2</sup>

b. Il passa rapidement devant le bar-restaurant en jetant un œil par la vitre, et revint. (Rivière : 81)

(4a)では、雨が空から落ち、そして蒸発して再び上がるというシーンだが、それぞれ主動詞はtomberとremonterであり、経路の一種と考えられている方向は含まれているが、「どのように」移動しているのか表現されていない。(4b)でも経路は主動詞であるpasserで表現され、副詞であるrapidementが移動のスピードを、en jetant以下が付帯状況としての様態を表現していると言える。

このように、フランス語では主動詞が経路を表し、様態が表現される場合には副詞または動詞の従属形が使われるという基本分布になる。(3b)のように移動事象に起点や着点が含まれない場合には、様態動詞が主動詞で使われることもあるが、起点や着点といった経路と様態を一つの文にまとめて表現する場合には、確かにフランス語はV言語型の構造をとると言える。

\* 本稿はMorita(2009)の第4章の一部を加筆・訂正したものである。

<sup>1</sup> 例文先頭の[#]は意図する解釈とは異なる解釈が得られることを意味する。(3b)は非文ではないが、(3a)とは異なり、洞窟の外から中への移動という意味が得られないということである。また、例文の先頭に[\*]を付した文は非文であることを意味し、自然さに応じて[?]も使う。

<sup>2</sup> 出典を示していない例文は作例である。括弧内に示した出典については(8)を参照。

### 1.3 問題の所在

まず、様態動詞あるいは様態という概念が指しうる範囲が明確ではないという問題がある。(3)と(4)では移動物の様子や付帯状況などをすべて様態として扱っているが、移動物の様態を表す *flotter* と移動には直接関与しない *jeter un œil* を均一に移動様態として扱うことに問題はないのだろうか。現状では、移動に付随するいかなるイベントも移動様態と仮定した上で、フランス語のようなV言語では動詞の従属形あるいは副詞によって様態が表現されると考えられているが、概念そのものに曖昧さが含まれている。

さらに、この仮定にしたがって様態を考えたとき、様態動詞の代表格と考えられる *marcher* などはジェロンディフで使いにくいという特徴を持っている。

(5) Il est allé à la gare {?en marchant/en courant}.

決して非文ではないが、歩くという移動様態は語用論的にデフォルトと捉えられるため(cf. Kopecka 2004)、*marcher* をわざわざジェロンディフで使うことはほとんどない(3.2の表1で見ると、実例の数としても *courir* と比べてかなり少ない)。もし相応の文脈、たとえば *il n'est pas allé à la gare en courant, mais en marchant* のような対比の文脈に入れるとこの不自然さが解消されるが、単文では使いにくいという語用論的な制約である。これに対し、*courir* であれば単文であっても許容されやすい。

この特徴は、同じV言語である日本語と比較した場合により鮮明になる。

(6) 彼は駅に{歩いて/走って}行った。

(7) a. 彼は階段を転がり落ちた。

b. \*Il est tombé dans l'escalier en roulant.

(5)に対応する文としては(6)のように「歩いて/走って」というテ形が使われ、いずれも容認可能である。また、日本語の「転がり落ちる」といった複合動詞では前項で様態が表され、主要部である後項で「落ちる」という経路が表現されることになるため、V言語型の構造にしたがうが、フランス語ではジェロンディフを使って同じ構造を保つことができない。つまり、様態動詞の統語的振舞いは一様ではなく、動詞の従属形を使っても様態を表現できない場合もあるのである。

このように、現状では(i)移動様態とは結局のところ何なのかという定義が明確ではなく、形式的な特徴付けもなされておらず、(ii)フランス語の様態動詞の統語的振舞いは均質ではないという問題がある。したがって、意味的に移動様態だと考えられる事象を形式的に

特徴付け、それらの統語的性質を分析することで、様態として一括されている多様な事象の性質を明らかにする必要があるのである。

### 1.4 研究目的と研究方法

以上の課題に対し、本研究は、(i)フランス語の移動表現における様態動詞を語彙意味論的に特徴付けることと、(ii)様態動詞が使われる統語的環境を分析することで、(3)~(5)のように意味的に同質ではなく、統語的振舞いも均質とは言えない様態動詞の分類を試みることを目的とする。

分析にあたり、まず分析対象とする移動動詞を画定する必要があるわけだが、何が移動動詞かという問題は今までに問われたことのない問いであり、移動動詞の厳密な定義は存在しない。移動という外界事象を描写するために用いられる動詞が便宜的に移動動詞と呼ばれており、様態動詞はその下位カテゴリとして扱われている。分析対象を限定するためには、先行研究のリストに基づく<sup>3</sup>、コーパスを用いてデータを収集する範囲を限定し、その中で現れる動詞を分析対象とする必要がある。本研究では、以下の現代小説から移動の描写を含む文を抽出してコーパスを作成した<sup>4</sup>。例文総数は2035であり、本文中での出典は括弧内に示した略語で指示する。

(8) a. Hubert Mingarelli, *Une rivière verte et silencieuse*, 1999, Points (Rivière).

b. Hubert Mingarelli, *La dernière neige*, 2000, Points (Neige).

c. Philippe Claudel, *La petite fille de Monsieur Linh*, 2005, Livre de Poche (Linh).

d. Jean-Philippe Toussaint, *La salle de bain*, 1985, Minuit (Salle).

これらの作品から移動を表している文を収集してコーパスとし、そこで使われている動詞を移動動詞として扱った。また、特定の動詞についてより多くのデータを参照し、用法の一般性を検証する必要がある場合にはFrantextも用いた<sup>5</sup>。

以下、第2節では様態動詞を語彙的に分析し、他の移動動詞と区別するための特徴を議論する。第3節では、様態動詞が使われる統語的環境を主動詞の場合とジェロンディフの場合に分け、それぞれのケースでの移動事象の性質を分析していく。

## 2

### 語彙分析

ここではまず、主動詞で使われた様態動詞のリストを示すとともに、様態動詞を他の移動動詞と区別するための語彙的性質を検討する。

#### 2.1 動詞リスト

2035の例文のうち、主動詞で様態動詞が使われていた数は315例あり、語彙項目の数は単純動詞と再帰動詞に関しては43だった。動詞例を(9)に示す。

(9) a. accélérer, arpenter, boiter, bondir, courir, conduire, danser,

<sup>3</sup> フランス語の移動動詞全般についてはLaur (1991)、Sarda (1999)、Kopecka (2004)などが充実したリストを提示している。様態動詞についてはWienold & Schwarze (2002)にもリストがあるが、本稿は個々の動詞が現れる統語的環境も視野に入れているため、扱う動詞が限定されるという欠点はあるが、コーパスを用いて分析対象を画定する方法を採用した。

<sup>4</sup> このデータは日仏対照研究を行ったMorita (2009)で用いたものであり、対照研究を目的とし、現代語を対象とするために、日本語訳の存在する比較的新しい作品を選んでいる。本稿ではフランス語に限定した議論を行うためデータの中からフランス語のみを対象としている。限られた文学作品のみをデータとしている点で一般性のない議論だという批判もあると想像されるが、より大規模なコーパスであるFrantextでも裏付けられる傾向に基づいてここでは議論を行う。

<sup>5</sup> <http://www.atilf.org/>。Frantextの使用に際して、十分な量を確保するために作業コーパスは1900年以降のテキストに限定した。1699テキスト、103,530,478語が検索対象である。

déambuler, dérapier, errer, flotter, foncer, filer, flâner, glisser, marcher, nager, naviguer, patauger, pédaler, planer, ramer, ramper, rôder, rouler, souffler, tourbillonner, traîner, trotter, trotter, vagabonder, voler, zigzaguer, ralentir, sauter, sautiller.

b. se balader, se hâter, se précipiter, se promener, se traîner, se presser, se bousculer.

c. accélérer le pas/la vitesse/l'allure, faire des bonds, faire des promenades, presser le pas, ralentir l'allure, faire des culbutes, etc.

このリストの(9a)は単純動詞、(9b)は再帰動詞であり、(9c)には他の様態動詞との意味的な類似性を考慮し、様態動詞に相当すると思われる成句表現(locution idiomatique)を入れてある。前述のように移動動詞の厳密な定義はないが、これらの動詞は移動できる人または物を主語にとったとき(場合によっては空間解釈できる基準物をとったとき)<sup>6</sup>、その指示対象が位置変化を起こすことが必要となるため、移動動詞として認定できる。

## 2.2 語彙的特性

(9)の動詞を様態動詞として分類するためには、何らかの言語的特徴に基づいて他の動詞と区別することが必要となる。本稿で用いた言語的特徴とは、アスペクトと線状性という性質である。様態動詞は、たとえば(3)の*entrer*や、典型的な経路動詞とされる*partir*や*arriver*とはアスペクトの性質が異なっている。

(10) a. Le taxi est arrivé à la gare {en/\*pendant} 5 minutes.

b. Paul a marché dans la rue {en/pendant} 5 minutes.

(11) a. \*Le taxi est en train d'arriver à la gare.

b. Paul est en train de marcher dans la rue.

(10a)の*arriver*では時間句として*pendant*を使うことができず、所用時間を表す*en*しか許容されないのに対し、(10b)の*marcher*ではこの時間句の分布が逆になる。また、(11a)のように*arriver*は進行形をつくる*être en train de*と共起できないのに対し(もう少しで到着するという準備局面、すなわち*sur le point d'arriver*に近い解釈なら許容されるとする人もいるが、純粋な継続ではない)、(11b)の*marcher*では進行形が許容される。(10a)(11a)の分布は*entrer*, *sortir*, *partir*といったその他の経路動詞とも共通しており、(10b)(11b)の分布は*courir*, *nager*, *rouler*などの(9)にリストした他の様態動詞にも共通している。つまり、様態動詞は非終結的(atélique)な動詞であり、*pendant*と共起でき、進行形を作ることができることを一つの特徴としている<sup>7</sup>。

さらに、線状性という点も検討しておく。

(12) a. La voiture a longé la rivière {en/pendant} 5 minutes

b. La voiture est en train de longer la rivière.

(13) a. Il a marché {dans le couloir / sur la route / dans la ville}

b. Il a suivi {le couloir / la route / \*la ville}

(12)のテストが示すように、*longer*や*suivre*, *avancer*といった動詞

は様態動詞と同様に非終結的な動詞である。しかし、これらの動詞は進行方向を既に含んでいる場合や(*avancer*, *se reculer*など)、基準物に特定の形状を要求する場合(*suivre*, *longer*など)があるなど、移動の方向に関する制約がある。したがって(13)のように、*marcher*では基準物として廊下や道路のような線形のもので、街のような一定の広さを持つものもとることができるのに対し、*suivre la ville*は解釈不能となる。また、*longer la ville*では街の境界線に沿って進むという特殊な解釈が要求される。この移動方向に関する制約が線状性であり、様態動詞とこれら方向を表す動詞はアスペクトの性質が同じであっても、様態動詞には線状性が含まれていないという点で区別することができる。

このように、移動動詞の一種としての様態動詞は、(i)移動物を主語としたときの位置変化の含意、(ii)非終結性と(iii)非線状性という特徴によって定義することができる。

## 3

### 統語的分析

ここからは、様態動詞が実際に使われた統語的な環境を主動詞とジェロンディフに分け、それぞれの環境で現れる様態動詞の意味的特徴を分析していく。

#### 3.1 主動詞の場合

前述のように、様態動詞が主動詞で使われている文は315例あった。そのほとんどは、語彙的特徴に合致して非終結的な移動事象を表す。

(14) a. Je n'avais aucun repère lorsque je marchais dans mon tunnel.

(Rivière : 8)

b. Ils semblaient glisser au ralenti sur le gravier. (Neige : 16)

c. Elle avait erré dans les rizières pendant des jours et des nuits.

(Linh : 42)

d. La chienne trotait vers eux entre les tas de neige [...]

(Neige : 48)

移動の局面を起点、着点と、この2点に挟まれた中間経路に分けた場合、様態動詞が主動詞のとき、移動物は中間経路にあるということが出来る。(14a)ではトンネルの中を移動しており、トンネルの始点や終点は移動に関与していない。同様に(14b)は坂道の中間部分、(14c)では田の中で移動が生じており、起点や着点といった境界は関与しない。(14d)のように移動の方向が*vers*で表現されることもあるが、やはり空間的な境界を含んだ移動ではなく、非終結的な事象である。これらの例は(3b)と同様に、V言語における基本的な様態動詞の用法にしたがっているということが出来る。

だが、少数ではあるが以下のような例も見つかっている。

(15) a. La brume bleue qui descend des montagnes vers le soir, à la

<sup>6</sup> たとえば*se hâter*などは直観的に移動動詞とは考えにくいですが、*il se hâtait sur la route de retour*などと言うとき、移動が起こっていると考えられる。

<sup>7</sup> 従来のアスペクトを利用した語彙分類(Vendler 1957)に即して言えば、活動動詞と一回相(semelfactive)を表す動詞ということになるが、活動動詞であれば自動的に様態動詞として認定できるわけではない。この点については例(12)以降の議論参照。



façon d'un châle qui glisse doucement sur des épaules.

(Linh : 11)

b. J'ai filé dans la cuisine chercher l'assiette. [...] Là il a sauté de son perchoir et s'y est mis tout de suite.

(Neige : 116)

c. Je sautai l'étroit canal des eaux usées.

(Rivière : 26)

(15a)の後半にある glisser doucement sur des épaules は、肩の上でショールがスライド移動しているわけではなく、そっと滑るように肩にかかるという移動になっている。つまり、épaules が着点として解釈される終結的な移動だといえる。また、(15b)、(15c)では sauter という動詞が使われているが、それぞれ son perchoir が起点、canal が中間点となった終結的な移動だと考えられる<sup>8</sup>。このように、主動詞が様態動詞であっても終結的な移動事象となることがあり、このとき文構造は S 言語型の構造となっている。

問題となるのは、どのような動詞がこの S 言語型の構造を許容するのかということである。これらの例は、様態動詞が主動詞で使われた 315 例のうち、わずか 25 例のみであり、その大半は jusqu'à による着点の導入(移動範囲の限定)であるため、(15)のような一般的な前置詞や直接目的語による着点、起点あるいは中間点の導入は例外的である。頻度としても非常に低いが、この構造を許容する動詞も非常に限定的であり、コーパス中では以下の動詞しか見られなかった。

(16) glisser, foncer, marcher, courir, sauter.

先行研究においても、Kopecka(2004, 2006)はフランス語には S 言語型の構造があることを明確に述べており、守田(2008)は Frantext を使った分析により、S 言語型の構造を許容する動詞を挙げている。

(17) glisser, sauter, rouler, courir, marcher, voler, ramper, se précipiter<sup>9</sup>.

本研究で現れた動詞(16)はほとんど(17)のリストに含まれている。より広い範囲からデータを収集した場合にも、特定の動詞のみが(15)で示した S 言語型の構造を許容することができる。これらの動詞の意味的特徴については 3.3 で議論することにし、次にジェロンディフで使われた時の語彙分布をみておく。

表1 ジェロンディフで現れた様態動詞の頻度

	Entrer	Sortir	Arriver	Partir	Monter	Descendre	Traverser	Total
Courir	26	74	54	121	30	56	62	423
Marcher	2	3	4	3	1	2	3	18
Rouler	0	2	3	0	0	2	1	8
Glisser	1	1	2	1	0	2	4	11
Flâner	0	0	0	1	0	0	1	2
Errer	0	0	0	0	0	0	0	0
Trotter	1	1	2	1	0	0	0	5
Nager	0	0	0	0	0	0	0	0
Voler	0	0	0	0	0	2	0	2
Ramper	2	5	1	2	2	1	0	13
Sauter	1	0	1	2	0	3	0	7
Déambuler	0	0	0	0	0	0	0	0

<sup>8</sup> 起点と着点の間の領域は均質な中間経路ではなく、franchir が常に終結的に振舞うように、中間点と考えられる地点がある。

<sup>9</sup> 守田(2008)ではその他にも se glisser と se faufiler も挙げているが、これらは終結的にしか用いられない。se glisser に glisser と共通する様態の意味が含まれていることは確かだが、同時に経路(着点)も含まれている。非終結性を様態動詞の基準とする本稿の立場では、これらの動詞は除外される。1つの動詞に経路と様態が重なることに関しては今後の分析課題としたい。

### 3.2 ジェロンディフの場合

様態動詞が用いられるもう1つの統語環境としてジェロンディフがある。コーパス調査では、ジェロンディフによる様態表現は51例あったのだが、問題となるのは使われている語彙項目である。現れた例を(18)に示す。

(18) a. 様態動詞: courir, marcher, rouler.

b. 移動の関連表現: traîner les pieds, faire des petits pas, etc.

c. その他の表現: tenir quelque chose contre lui, aboyer, rire, crier, regarder, hurler, siffler, imaginer, jeter un coup d'œil, se contorsionner, etc.

様態動詞としては(18a)の courir, marcher, rouler のみであり、他は網羅的ではないが、(18b)の移動に関連する表現か、(18c)の移動とは関係なく成立する事象となっている。具体例は次の通りである。

(19) a. Une bête a traversé le faux plafond en courant et s'est mise à gratter quelque chose. (Neige : 57)

b. Le vieil homme avance en faisant des petits pas. (Linh : 35)

c. Je descendis les escaliers en regardant autour de moi. (Salle : 67)

(19a)では courir がジェロンディフで使われ、一匹の獣が架空の天井を走って横切ったという状況が表現されている。(19b)で使われている faire des petits pas は移動との結びつきは強いと言えるが、その場で足をばたつかせる状況でも使えることを考えると、これ自体が移動表現だとは必ずしも言えない。また、(19c)の regarder は明らかに移動動詞ではない。(19b)と(19c)はそれぞれ、avancer や descendre が表す移動事象と同時に起こっている事象であり、付帯状況という広い意味での様態だと考えることはできるが、移動専用の様態表現というわけではない。

(18a)に示したように、様態動詞のタイプ頻度(type frequency)は3であり、生起回数(token frequency)としても51例中6例しかない。様態動詞がジェロンディフで使われることはほとんどなく、むしろジェロンディフは移動と同時に生起している付帯状況を説明するために用いることが多いと考えることができる。

この傾向は Frantext でも裏付けられる。本研究のコーパスで頻度

の高かった経路動詞を主動詞に設定し、その経路動詞との組み合わせにおける、ジェロンディフで使われた様態動詞の頻度を調査したところ、表1の結果が得られた。表1は、横軸に主動詞で使われた経路動詞を示し、縦軸に、これらの動詞との対応で、ジェロンディフで使われた様態動詞を示している。

頻度としては courir が突出して高く、他の動詞がジェロンディフで使われることはほとんどないことが分かる。その中であって、本研

究のコーパスでも使用が確認された *marcher*, *rouler* は一定の使用回数  
数が確認され、*ramper* や *glisser*, *sauter* も使われていることが分かる。

S言語型構造を許容する様態動詞と同様に、ジェロンディフで使わ  
れる様態動詞も非常に限定的だと考えることができる。

### 3.3 統語的自由度と概念レベル

動詞のリスト(9)と、3.1, 3.2での分析結果を比較したとき、S言語  
型の構造を許容する動詞と、ジェロンディフで使われやすい動詞は非  
常に限定的であり、また *courir*, *rouler*, *glisser* のように両方の統語環  
境で現れる動詞は重複していることが分かる。なぜ、これら一部の動  
詞だけがS言語型の構造を許容し、ジェロンディフで使われやすいの  
だろうか。

S言語型構造を許容する動詞の意味特性は、従来、力動性(*force*  
*dynamics*)あるいは衝撃性移動(*ballistic motion*, cf. Slobin 2004)という概  
念で説明されてきた。これらの概念は、たとえば *marcher* と *courir* がも  
たらす次の解釈の違いを説明するためには有効である。

(20) a. #Il a marché à la gare.

b. ? Il a couru à la gare.

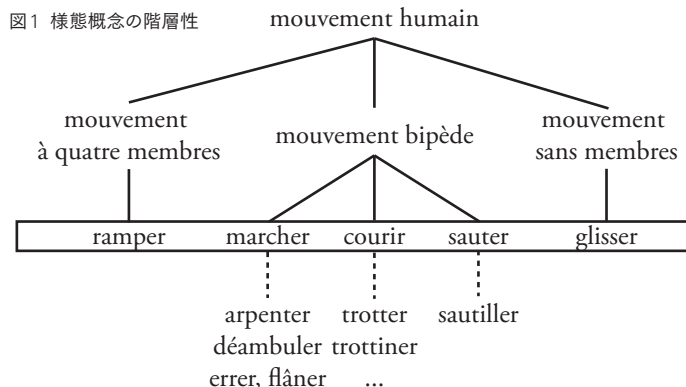
(20a)では駅を着点として解釈するのは難しく、駅内部での移動  
として解釈するためには *dans* など、別の前置詞を使う方が普通であ  
る<sup>10</sup>。他方、*courir* を使った(20b)では着点としての解釈が *marcher*  
と比べて容易である。これらの動詞が表すスピードの違いを力動性  
や衝撃性として考えるならば、(20)の解釈の違いを説明することが  
できる。だが、衝撃性をめぐってはいくつかの問題がある。1つは、具  
体的に衝撃性を含んだ動詞がどのようなものなのか特定する方法が  
明らかではないという点である。また、*marcher* と *courir* の間にあるス  
ピードの違いを考えたとき、なぜ遅い移動である *ramper* でS言語型  
の構造が可能であるにも関わらず、*ramper* よりも速い *trotter* などでは  
不可能なのか説明できない。つまり、同じスケールで比較することが  
できないという問題であり、すべてのS型構造を許容する動詞を力動  
性という単一原理では説明できないということである。

ここでは、統語的自由度と動詞の記述性(*descriptivity*, cf. Snell-Hornby  
1983: 35)という概念を用いて新たな説明を試みたい。記述性とは、  
Boas(2008)が語彙の分類に適用している概念であり、動詞に語彙化  
されている情報量または情報の具体性を意味している。たとえば、英  
語の *walk* は記述性の低い動詞であり、現れる統語環境としては *walk*  
*in the street* のような自動詞構文だけではなく、*walk to the station* の  
ような着点との共起や、*walk someone to the station* のような使役移  
動でも使われるという特徴を持っている。逆に、*trotter* のような記述  
性の高い動詞は自動詞構文で使われることがほとんどである。

3.1, 3.2の分析から、一部の様態動詞のみがS言語型の構造を  
許容し、なおかつジェロンディフでも使われやすいことが明らかとなっ  
ている。つまりこの結果は、これらの動詞の統語的自由度が高いこと

を意味している。換言すれば、これらの動詞は記述性が低いために  
統語的自由度が高くなり、ジェロンディフで現れ、またS言語型の構  
造をとるのに対し、その他の様態動詞は記述性が高いために統語的  
な自由度が低くなり、結果的に主動詞としての用法に限定されること  
になる。

概念図としては次のように考えることができる。



この図では、*ramper*, *marcher*, *courir*, *sauter*, そして *glisser* という統  
語的自由度の高い動詞を基本レベルとして示している。これより上位  
の概念としては「二本足での様態」「四足の様態」「手足を使わない様  
態」などが考えられ、さらに上位には人間の移動様態という概念を想  
定している。逆に、記述性の高い動詞はより下位に位置することにな  
る。

このように、記述性という概念によって特徴的な振舞いを示す動詞  
の意味的特徴を説明することができるのと同時に、この記述性の高  
低によって動詞を分類することも可能である。つまり、様態動詞の中  
でさまざまな統語環境で現れる動詞と、主動詞の用法に限定された  
動詞という区分である。

### 3.4 非主要部による様態表現の意味的特質

最後に、主動詞以外の統語要素で表される様態表現の頻度と語  
彙項目を分析する。調査結果は次の表2の通りである。

表2 様態を表す非主要部の統語要素

ジェロンディフ	副詞	接置詞	その他	計
17.5%	29.1%	38.0%	15.4%	100.0%
(n=51)	(n=85)	(n=111)	(n=45)	(n=292)

全292例のうち、副詞と前置詞句を用いた様態表現が大半を占め  
るという結果である。具体的には、次のような表現である。

- (21) a. *lourdement*, *violemment*, *rapidement*, *lentement*, *brusque-*  
*ment*, *précipitamment*, etc.  
b. *à grand pas*, *à pas lent*, *à petites foulées*, *à pleine vitesse*, etc.  
c. *en voiture/bus/trains*, *en silence*, *en petites foulées*, etc.

<sup>10</sup> たとえば *j'ai beaucoup marché à la gare avant de trouver mon train* のような場合、駅内部  
での移動であって着点ではない。ネット上などでは *à* を着点として解釈する文も散見される  
が、インフォーマント4人に聞いたところ *jusqu'à* の使用が義務的だという返答だった。

- d. avec précaution, avec lenteur, avec indifférence, avec assurance, avec le sourire, etc.
- e. d'un bon pas, d'un pas raide, d'une démarche singulière, de son pas régulier, etc.
- f. dans un bruit, sans bruit, dans un silence, sur la pointe des pieds, etc.

V言語では、様態は副詞や動詞の従属形で表されると考えられているわけだが、表2によると、フランス語では動詞の従属形ではなく、副詞や前置詞句が主要な表現手段だといえることができる。

さらに、(21)に示した副詞や前置詞句による様態表現のリストでは、ほとんどの項目が移動表現以外でも使えることが分かる。(21a)に挙げた-mentを含む副詞はすべて移動以外の事象にも使うことができ、(21d)のavecを用いた表現や(21f)の音に関する表現も非常に汎用性が高い。このリストの中で移動専用の様態表現だと言えるのはpasやfouléeといった特定の名詞を含んだものあるいは移動手段を表すenを含んだ表現に限られている。

様態動詞をジェロンディフで使うことが非常に少なかったことと総合して考えると、主動詞に様態動詞が使われる場合を除き、フランス語の移動様態表現は他の事象にも利用できる様態表現が移動事象に利用される場合がほとんどであると言える。同じV言語である日本語と比べてとき、日本語にはflâner, déambuler, rôderなどに直接対応する動詞がないといった点で、フランス語の様態動詞の数は多いと言える。だが、その動詞の使用範囲は非常に限定されており、そもそも経路動詞と様態動詞との複合的な表現がほとんどないという特徴を持っている。

#### 4

### 結論と今後の課題

分析の結果、様態動詞は、語彙意味論的・統語的特徴によって少なくとも3つに分けられる。

- (22) a. 移動動詞の一種としての様態動詞であり、主動詞だけではなく、ジェロンディフでも使われ、S言語型の構造を担うこともあるという統語的特徴をもつ。
- b. 移動動詞の一種としての様態動詞であり、ほとんどの場合、主動詞で用いられ、非終結的な移動を描写する機能を主とする。
- c. 主動詞で使われた場合に移動事象を表さず、ジェロンディフで用いられることで移動事象と同時に生じている事象を描写する機能をもつ。

このように、語彙的特徴と統語的特徴によって曖昧さを含んでいた様態動詞に一定の分類を加えることが可能となる。

最後に今後の課題を2つ挙げておきたい。1つは、動詞以外の要素、特に移動物に注目した研究の展開である。たとえば図1では、統語的自由度の高いroulerは人間の移動としては考えにくいため除外し

ており、また、蛇などの移動もramperで表現できるが、その場合は人間の四足の移動でもないため扱っていない。様態という概念は移動物の性質と関係している可能性が高いため、移動物の性質を考慮することで、図1とは異なる、あるいは拡大した様態のスキーマが見つかる可能性もあると考えられる。

もう1つは、中間的な統語的自由度を持つ動詞の問題である。図1において、trotter, trotterはcourirあるいはmarcherの下位に位置する、比較的記述性の高い動詞として扱っている。この記述性の高さと反比例するようにS言語型の構造で使われることはないのだが<sup>11</sup>、その反面、ジェロンディフでは使われやすいという統語的自由度も持っている。この理由としては、元々の様態の意味「小走り」が表すスピード面に焦点があたっていることが考えられる。たとえばcourirがil a couru à la gareで駅への移動を表すときには「急いで行く」に近い意味として捉えられる。また、marcherがsurとともにS言語型の構造をとるときには「入る」「踏み込む」という意味となり、二足歩行という元々の様態の意味は失われるが、素早い移動は表さないということが起こる。ここからの類推で考えるなら、trotterの統語的振舞いが中間的なのは、同じ二足移動の様態courir, marcherとの比較において中間的なスピードという面が重視されていることが考えられる。決して元々の様態の意味「小走り」が失われているわけではないが、元々の様態を構成する一部の側面に焦点が当たることで一定の統語的自由度が獲得されるというシステムを想定することができる。記述性だけではなく、元々の様態の意味の濃淡や、局所的に抽出可能なスピード(力動性なども無関係ではない)といった要素も考慮して多角的に分析することで、様態という概念をより明らかにすることができるだろう。

<sup>11</sup> il a trotté à la gareで着点の解釈をするのは非常に難しく、インフォーマント3人に聞いたところ着点の解釈は無理だということであったが、Aurnague(2008)はtrotter dans la cuisineで台所の中に「入る」という解釈が可能であると指摘している。スピード面を取り出すことで統語的自由度は獲得されるが、courirほど浸透していないという見方ができるだろう。



[参考文献]

- Aurnague, Michel (2008) « Qu'est-ce qu'un verbe de déplacement ? Critères spatiaux pour une classification des verbes de déplacement intransitifs du français », Durand, Jacques, Bruno Habert & Bernard Laks (éds.), *Congrès Mondial de Linguistique Française '08*, p. 1905-1917.
- Boas, Hans C. (2008) "Towards a Frame-Constructional Approach to Verb Classification", *Revista Canaria de Estudios Ingleses*, 57, p. 17-47.
- Boas, Hans C. (2009) Methods for Finding Proper Types of Constructional Generalizations, Lecture Plénière au Troisième Colloque International de l'Association Française de Linguistique Cognitive, Université Nanterre Paris X, France.
- Kopecka, Anetta (2004) Étude typologique de l'expression de l'espace : Localisation et déplacement en français et en polonais, Thèse de doctorat, Université Lumière Lyon 2.
- Kopecka, Anetta (2006) "The Semantic Structure of Motion Verbs in French", Hickey, Maya & Stéphane Robert (Eds.), *Space in Languages: Linguistic Systems and Cognitive Categories*, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins, p. 83-101.
- Laur, Dany (1991) Sémantique du déplacement et de la localisation en français : Une étude des verbes, des prépositions et de leurs relations dans la phrase simple, Thèse de doctorat, Université Toulouse-Le-Mirail.
- Morita, Takahiro (2009) La catégorisation des verbes de déplacement en japonais et en français, Thèse de Doctorat, École des Hautes Études en Sciences Sociales.
- Sarda, Laure (1999) Contribution à l'étude de la sémantique de l'espace et du temps : Analyse des verbes de déplacement transitifs directs du français, Thèse de doctorat, Université de Toulouse-Le Mirail.
- Snell-Hornby, Mary (1983) *Verb-Descriptivity in German and English: A Contrastive Study in Semantic Fields*, Heidelberg: C. Winter Universitätsverlag.
- Slobin, Dan I. (2004) "The Many Ways to Search for a Frog: Linguistic Typology and the Expression of Motion Events", Strömquist, Sven & Ludo Verhoeven (Eds.), *Relating Events in Narrative, vol. 2: Typological and Contextual Perspectives*, New Jersey/London: Lawrence Erlbaum Associates, p. 219-257.
- Slobin, Dan I. (2006) "What Makes Manner of Motion Salient? Explorations in Linguistic Typology, Discourse, and Cognition", Hickey, Maya & Stéphane Robert (Eds.), *Space in Languages: Linguistic Systems and Cognitive Categories*, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins, p. 59-82.
- Stosic, Dejan (2008) La notion de « manière » dans la sémantique de l'aspect, Présentation orale à la journée d'études « Il y a manière et manière », Université d'Artois, Arras.
- Talmy, Leonard (2000) *Toward a Cognitive Semantics vol. II: Typology and Process in Conceptual Structuring*, Cambridge/Massachusetts: The MIT Press.
- Vendler, Zeno (1957) "Verbs and Times", *The Philosophical Review*, 66 (2), p. 143-160.
- Wienold, Götz & Christoph Schwarze (2002) "The Lexicalization of Movement Conception in French, Italian, Japanese and Korean: Towards a Realistic Typology", *Arbeitspapier*, 112, p. 1-32.
- 松本曜 (1997) 「空間移動の言語表現とその拡張」田中茂範・松本曜『空間と移動の表現』研究社、148-230ページ。
- 守田貴弘 (2008) 「移動表現における接置詞と様態動詞の機能—日仏対照の視点から」『フランス語学研究』第42号、日本フランス語学会、31-44ページ。
- 守田貴弘 (2009) 「移動表現における非主要部の従属度と類型の段階性」『日本認知言語学会論文集』第9巻、日本認知言語学会、372-382ページ。